風また風

創立 20 周年

JCA記念会報

2003年（平成15年）12月

JCA記念会報

ＪＣＡの 始まり

トッテン知子

下の娘が小学校の生活にすっかり慣れてきた頃、今まで子ども中心だった生活の激変に伴い何かポッカリ穴が開いたような気分になっていました。子ども達はますます外の社会に目を向けていくだろうし、どんどん親離れしていくに違いない。これから誰からも必要とされない人生を送っていく恐ろしさ。そんな時、英語を習っていた仲間４人と、何か家族以外の人のために役立つ事が出来ればいいなという思いで、たまたま家の近くにあったボランティアセンターを訪ねました。そこで私達の漠然とした話を聞いてくださり、アドバイスをしてくださった下澤さんが、外国の人に日本語を教えるボランティアをする事を提案して下さいました。何もわからない私達に、1から10まで色々と指導してくださった事が、今のＪＣＡの基礎となっているのです。
最初は外国の人達に、日本という異文化のなかでの生活をよりよいものにしてあげられたらという思いで始めました。

こんな病気のときは、どこの病院へ行けばいいの？
こんな物が欲しいけど、どこで安く買えるの？
こんな人を探しているけど、どうやって探すの？
テニスをしたいけど、プールに行きたいけど。。。etc

モデルをやりたいという美しい女性の面接に付き添って行った事もありました。そういった生活レベルでの援助をしていくうちに、やはり一番大切なのはコミュニケーションだと気づき、（必要最低限の言葉は勉強してもらわないと）日本語を教えるようになりました。そして、いつのまにか人数が増えひとり一人のニーズに応えられなくなってしまいました。また、ＪＣＡに来られる外国の人達も様変わりして、日本語検定を受けたいという人や、仕事上どうしても日本語が必要な人達が増え、日本語を教えるだけの会になってしまいました。それは必然的な事だったのですが、私達４人が始めた頃とはちょっとづつ変わっていったのも事実でした。

いずれにしてもたくさんの外国人が日本語を習いに来て、それを支えてくれるたくさんの会員がいる事によって、このＪＣＡが成り立っている事には変わりはありません。

これからも益々ひとりでも多くの外国の人に喜んでもらえる会であってほしいと思います。

ＪＣＡ創立２０周年の年

ＪＣＡ千歳船橋会長　　長野　一美

2003年はＪＣＡ創立20周年の年です。２０年の歩みを振り返り、ＪＣＡ発足当時の姿、たどってきた事実を形に残したいという発案で、この『「風また風」ＪＣＡ20周年記念会報』を発行することにしました。20年という期間は大変な重みとして受け止め、この間の歴史を共有し、ＪＣＡを語り継いでいってほしいという願いを込めています。この年に「JCA千歳船橋」と「JCA玉川」に組織を分割したことは偶然です。新たな出発をする今、誇りと喜びをもって記念会報を作り、創立20周年のお祝いにしたいと考えました。

組織分割に至った経緯はJCA総会で説明したとおりですが、この場を借りて再度お話し、会員の皆さんの記憶にとどめていただきたいと思います。

ＪＣＡは会則上一つの組織でありながら、「ＪＣＡ千歳船橋」と「ＪＣＡ玉川」が存在し、会計基準を別個に取り決め運用し、「おしゃべりひろば」、会報発行、保険加入、「世田谷ボランティア協会ささえる会」団体会員、文化庁登録は個別に行っていました。そして、教室移転のように対外交渉をするとき、形の上だけの会長制では機能しません。2年間副会長として運営に関わるうちに、組織運営のあり方に矛盾を感じ疑問を抱くのは一人ではないことを知り、さらに積年の課題であることを聞かされ、2002度JCA会長、両副会長が話し合いの上、ＪＣＡ組織分割を2003年度総会に諮ることにしました。

2003年４月ＪＣＡ総会で組織分割を提案、議論を経て今年度より「ＪＣＡ千歳船橋」と「ＪＣＡ玉川」に分割し、独立運営することが議決されました。それぞれで会則を制定し、会長・副会長を一名ずつおき、総会はそれぞれで開催します。そして、独立した組織になっても「ＪＣＡ」としてまとまりを保つために、「パンフレットは従来どおり作成」、「講習会開催は協議しながら開催」、「会則交換」、「総会議事録交換」、「必要に応じて合同の話し合いを開催」の5項目を確認し、提案に添えた「覚書」として双方で保存します。

1990年にＪＣＡ玉川教室が開設されて以来、別々の組織でありながら形式上「ひとつのＪＣＡ」として運営されていた、その矛盾を解決したに過ぎません。独立した組織となっても「ボランティアによる日本語教室」が何ら変ることはありません。「ＪＣＡ」という共通の理念の下に活動は続きます。しかし、一見単純に解決されたかのように見えても、実際の運営の場面では困惑を感じることが多々あります。けれども両方を経験し分割前と後の運営に携わった者の個人的な一過性の困惑であってほしいと願っています。

ＪＣＡ２０周年によせて

ＪＣＡ 玉川会長　永井　秀子

千歳船橋での数人の方々の優しい思いが少しずつ輪を広げ、同じ思いを共有できる方々の多くの参加を得て２０周年を迎えることが出来たことは素晴らしい限りです。ＪＣＡ 玉川の６クラスと合わせ１３クラスもの大所帯になり世の中の移り変わりと共に ＪＣＡも山あり谷ありといろいろありましたが初心を忘れることなく会員それぞれが無理のない活動でこの先30年40年と息の長い活動ができます様お祈りいたしております。私自身ＪＣＡ の活動に参加できる機会を得、日本語の素晴らしさ、難しさをまだまだ勉強している日々です。

日本語を教えることによって国内外に多くの友人、知人を得たことに感謝しております。

ＪＣＡ創立二十周年記念会報

目次

1 ……ＪＣＡの始まり……トッテン知子
2 ……ＪＣＡ創立二十周年の年……千歳船橋会長　長野　一美
　　ＪＣＡ二十周年によせて……玉川会長　永井　秀子
3 ……目次
4 ……二十周年特別記念座談会
9 ……ＪＣＡの思い出……下澤　嶽
10 ……これまで　そして　これから…　世田谷ボランテイア協会　山崎　富一
11 ……ＪＣＡの足跡
18 ……広報誌の軌跡
24 ……「風また風」のみなさんへ「ＳＥＡＳＯＮＳ」の仲間たちより
25 ……二〇〇三　クラスの顔
27 ……二十年のご支援ありがとう
28 ……ＪＣＡの歩み
32 ……会員数の推意／あとがき

二十周年特別記念座談会

二〇〇三年　八月二十一日(木)

トッテンさん、四家さん、坂本さん、山口さんをお招きしてお話をうかがいました。

―一九八三年　九月にJCAが創立されました。当時のお話をお聞かせください。

トッテン　この年とは覚えていませんが、英語のレッスンをしていた人たち（立松暢子さん・小宅美奈子さん・岩動純子さん）と「英語を生かしたボランティアをしたいね」とボランティアセンターを訪れたら、センターの人に「日本語を教えたら」と言われ、始めました。始めは個人のお宅でやっていましたが、ボランティアセンターの下澤さんが全面的にバックアップしてくれまして千歳のボランティアセンターを貸してくれました。

―どのようにして学習者を集めたのですか？

トッテン　いろいろな所、たとえば新宿の紀伊国屋でビラを配ったり、学習者や会員を集めるために個人の家のポストにビラを入れたりしました。

―スタートした時点で困ったことは？

トッテン　思ったほど人が集まらなかった事。目的がはっきりしていなかった事。日本語を教えるというより、困った人に日本での生活レベルのアドバイスをしたかった。

山口　それは教えるというより、外国人との交流が目的であった。（それは会長のページにも書いてあるよ）

山口さん

トッテン　今は日本語を教えるということになっていますが、当時は自分達で対処できない問題、たとえば就労許可書を取るとか、ビザ証明を取るとか、思っていた以上の要求が多くて困った。

―そういう時はどうしましたか？

トッテン　下澤さんに相談しました。

―四家さんはおひとりでされていたのですか。

山口　八六年に四家さんはいっしょになることを拒んだんだよね。八七年の名簿に四家さんの名があるよ。

四家　実は偶然に出会ったザンビアの人に強引に教えてと言われ仕方なく始めました。田園調布の駅前のコーヒー店でコーヒー代やその他の代金を私が払ってスタート。その当時は下澤さんに相談したら、トッテンさん、山口さんグループに合併をすすめられたけど私は英語はできないし…と言う事で、合併することをしぶったのです。その人は大使代理の男性の方で、能楽、N響、世田谷美術館、児童館他、国会図書館の友人などと教育関係を中心に案内し見学しました。見るだけのつもりだったのに、各施設の職員の対応は素晴らしいものでした。人種による差別をうけるこ

とは全くなかったのです。しかし一ヶ所だけ福祉作業所のバザーで千五百円程度の品物を押しつけられました。ザンビアの方はそれをプレゼントされたものと思ったらしいのであとで私はお金を払いましたが。運転手付きの車で来ていたのにお金は持っていなかったの。外国人に対してボランティアをするということは日本人が枝葉末節とみなしているような事柄が重要な事であり、これをわかっていないとできないことです。トッテンさんが教えているところや山口さんが黒板の前で説明しているのを見て、日本語と日本の文化を教える活動はすばらしいと思い、山口さんと合併しました。その後ザンビアの方との日本語その他の交流は八六年から三年半ほど続いて文通は今でも…。家族ぐるみのおつきあいです。

四家さん

―ＪＣＡの名前の由来は？

トッテン　４人で考えました。

山口　すごい名前だね。（笑）

四家　名前がいいと思う。がつがつしていない。持っているもので外国の方に教えていく、いっしょに勉強することを楽しんでやっていました。会費もないし個人の責任でしていました。

―八九年に山口さんが初代会長になりました。

山口　男性が私一人だったし「やって―」といわれ会長になった。（笑）

トッテン　会員もふえてきてそのころなんの決まり事もなく、山口さんにたたき台をつくってもらった。

山口　通常は二年のところ私だけ四年やっているのね、それは九〇年に玉川がスタートすることになって会長をどうするかということになり、玉川に副会長をおくということになった。それで、もう二年会長をやった。

―九〇年秋に玉川がスタートしましたが何かトラブルでも？（笑）

山口　いや、トラブルはなかった。玉川方面(瀬田)の生徒が多かったこと、ボランティアビューローができたことで別れた。

坂本・四家　最初別れることは気がすすまなかった。

山口　久野さんに分室を作るより、別の会を作りなさいと勧めた。

四家　お互いに一緒に活動したいと言う気持ちが強かったのです。

坂本　一緒に活動したいと言う気持ちと、玉川に作れば生徒さんが通いやすくなると言う思いとが矛盾していました。

―それで九二年あたりからどんどんクラス数が増えていったのですね。

トッテン・山口　新聞・都の印刷物・ハナコ(雑誌)などに載って百五十人の人が話を聞きに来た。

山口　Ａ新聞が自宅に取材にきた。それでドッと問い合わせが殺到した。

坂本　それらはその時の曜日委員が対応

しました。写真を撮ってはいけない外国人もいて日本人会員だけの写真を撮りました。取材を受けて「人権委員会」と言う勉強会をトッテンさんの家でやったことがあります。

四家　港区でもやっていましたが生徒さんから月に三千円の会費を取っていた由。ＪＣＡはまだ会費の徴収をすることなく、すべての費用は会員が個人負担していました。八七年より世田谷区が支援をきめてＪＣＡは五万円もらいました。

その当時、夜の授業でスペイン人を教えていましたが時間の観念が薄く会員が教室で待ちぼうけをくわされることがあったり…。しかし教える側の誠意はちゃんと理解されていて見る人は見ているのだなと思ったの。約束を守らない相手に屈辱を感じましたが自分は約束を守るという態度。誠実さを見てくれる人がいると感じたのです。ＪＣＡに対するボランティアセンターの期待は筋がとおっていたように思います。自信を持ってスタートしたわけではない私は、励ましをいただきました。

―八八年に始まった第一回スピーチコンテストの審査委員をしたそうですが。

坂本　おかしいけど楽しかった。その時はコンテストだから一等、二等、三等賞まで順位をつけました。

四家　「特別おもしろかったで賞」「よく勉強したで賞」などもあったね。ご褒美は各自家にあるものを持ちよって賞にしました。ボランティアセンターのバザーのグループに品物を分けてもらって、賞にあてたこともあったり。

山口　二年続けてコンテストをやって、三回目に「おしゃべりひろば」と名前を変えたんだよ。

―他にも何か違いはありますか。

坂本　以前は横のつながりがよくて曜日のちがう会員と食事などをしたり、生徒さんを自宅に招き料理したり、招かれたりということがよくありました。

坂本さん

山口　家でお花見をやりましたよ。家庭でいっしょに楽しむ事が多かった。バス旅行もあった。＊五島美術館や神代植物園に行ったなぁ。世田谷区が無料でバスを用意してくれたんだよ。

＊その他大森の浄水場・清澄公園・

＊朝日新聞印刷場・江戸博物館に

＊行かれたそうです。

坂本　「〇〇をするよ」というと自主的に手があがって「私は××するわ」とすぐにいろんなことが決まった。

トッテン　今は人数が多くなって活動しにくくなったように感じる。規制も多くなって・・・

四家　今は人間関係が深まらないような気がします。

―二〇〇三年、月曜から金曜まで八クラス会員数、百名です。どんなお気持ちですか？

トッテン　びっくりしています。昔がなつかしい。今は木曜日の夜の活動だけで、「おしゃべりひろば」で他の方に会うくらいになっています。

四家　まったく同感です。私、骨折をしてから、家に来てくれるならお付き合いできるけれど、ということで今は家でやっています。アフターケアーというとなんですけど以前の方でまた「教えて」という方などと、家で続けています。長いお付き合いでもお互いの国の文化というのは難しいです。以前に「きけわだつみのこえ」をテキストにして学んでいるアメリカ人もいて、私はとても感動しました。しかし私がこのアメリカ人のように深くアメリカについて学んでいるかどうかと考えると胸が詰まる事もありました。今「声に出して読む日本語」や区の資料（保健所が無料で発行している子どものための養育資料）なども テキストに使ったりしています。広い幅の人が来るという感じを受けますね。

トッテンさん

―坂本さんは退会されていらっしゃいますが。

坂本　金曜日で活動していました。最初の思いと違ってきてしまって。ＪＣＡの理念と違うところが出てきて、「こうしましょう」というエネルギーが湧いてこなくなった。ＪＣＡを退会してからは別のボランティアで活動しています。でも今でも元金曜日の仲間七名で食事や音楽を楽しんでいます。日本語を教えるのは手段であって、他のプラスαのことがたくさんありました。今はプラスαの部分が欠けていると感じます。講習を受けて教える技はあっても「心」が欠けているように思う。日本語のみを教えていればいいのではないと思う。またトップの意志を伝えたいと思っても曜日委員会に、曜日委員の欠席が目立つ。曜日委員は出席できなければ代理人を出すべきであり、責任感が薄いように感じました。仕方のないことかもしれないけど…。

山口　会の話しあいを聞いていても上下関係がなくて、「私がやる」と言う人がいてすぐにまとまることが多かったが、最近はそういった事がなく「私はやらない」という人が多くなった。（会員が役割を拒否するようになった）

トッテン　外国の人の役に立ちたいというのが、日本人のために（自分のために）やる傾向が多い。外国語ができるから、ひまだから…日本人の為に働いている感じが多くなった。日本人に対する怒りを感じます。

坂本　勿論全員ではありませんが、ひとりひとりの対応が人間味に欠けてきたという気がして残念に思います。養成講座を出なければできないボランティアではない。一時間半をどう使うか、買い物に行ってもいいし、個人個人で対応すればいい。曜日委員は大変な仕事だからと、順送りで決めることなく、その人の資質をわかってやるべきであると思う。自分は思い入れが強いので、最近のやり方に不満を感じていました。

四家　「金髪の可愛い子と話がしたいから」、「〇語を話せるから」と言って来る人もいるけど、変な自国語で日本語を説明されることが一番嫌だという外国人の話をきいたことがあります。

山口　以前うちでお花見をやったときにある学習者が「今日は授業がないのですか？」と言ったので「先生がたくさんいるから誰でもいいよ」と言ったら「ボクは中野先生がいいです。」と言った。なぜなら「中野先生は英語を話さないから」そしたら中野さんが「話さないのではなく話せないのです」と言ったので皆ドッと笑った。相手が日本語を勉強したいのだから、日本語で教えるのがいい。ちょっとわからないときに、単語を英語にしてあげるくらいにして。　それに会員同士の話が少なくなってきた。クラスが終わったあとのガヤガヤが少なくなった。ＪＣＡのことも話すし他の話をするのがいい…。

坂本　ＪＣＡに来ても自分の生徒と向かい合うだけで隣の生徒の顔や国籍も知らないという状況でしょ。クラスが終わったらサッと帰る人が多くなった。以前は最初の十五分は全員で授業をしていた。「日本語では『一』は『いち』というけど、あなたの国ではなんというの？」とか。遅れてくる生徒さんや会員がいても会員全員が生徒さんのことを知っていたし、声を掛け合ったり、冗談を言い合ったりして、会員も生徒さんもみんなが知り合っていた。今日本語を教える会は多いのだから心のある、何かあったら助けてあげる会・お金のことは除いて（笑）：相談しやすい会になって欲しい。それにはやっぱり横のつながりが大切だと思う。今はみんなが個人個人という感じで自分の生徒さんとの授業が終わると帰ってしまう。

四家　はじめから、山口さんからは、女性の地域の活動をわかってくれる人という印象を受けとても嬉しかったし、会員みんなの能力や実力を引き出しながらＪＣＡをみてくれるという感じで、それは頼もしかったのです。基礎をトッテンさん、山口さん、坂本さんが作ってくれたことでここまで続いているのね。

坂本　ボランティアセンターにはいろいろとお世話になり感謝しています。

四家　できれば「ボランティアをささえる会」にみんなで参加していただきたいと思います。

記録　浅野・芹澤
聞き手・構成・写真撮影　泉（広報）

JCAの思い出

下澤　嶽

私が世田谷ボランティア協会で学んだことはたくさんありました。JCAの立ち上げに係われたこともその一つです。

ことのはじめは、4名の女性がボランティア・センターに相談にこられたことから始まりました。（たしかトッテンさん、小宅さん、立松さん、岩動さんでしたね。）できるだけ世田谷在住の外国人に日本の文化を紹介し、交流を進めたいといったご相談でした。私は、アジア系外国人の方がなかなか日本の文化に馴染めない、また言葉の壁で苦労しているといった印象を持っていました。そこで、そういった方々に日本語を教える活動を中心に展開されてはどうか、その上で文化的な交流などを進めてはどうかといったアドバイスをした覚えがあります。

かといっても、当時は前例がない活動でした。日本語の指導方法や世田谷の外国人への広報の方法を徐々に勉強していきました。最初は人づてに数名の外国人がいらっしゃるだけで、1対1でボランティア・センターの隅をつかって教えていたことを思い出します。欧米系の方、アジア系の方、アフリカの方もいらっしゃいました。外国人の方がボランティア・センターに出入りすることは、当時は珍しい活動のひとつでした。

徐々に口コミで活動のことが知れ渡り、アジア系の外国人の方もポツリポツリと人づてにこられるようになしました。一番反響が大きく出たのは、英語、韓国語、中国語でかかれたチラシを区役所の外国人登録課の窓口に置くようになってからです。登録手続きにこられる外国人の方がそれを見て、問い合わせてくるようになり、生徒の数はぐっと増えました。クラスも固定した曜日に、週2回から3回程度に増やしていきました。生徒さんたちは様々な国からの方たちでしたが、やはりアジア系の方が多く見られました。日本語の弁論大会や交流会を開催し、最初の1年は徐々に広がる活動に、みな一生懸命でした。その頃メンバーの方々が、「アジアの人がこんなにたくさん世田谷で苦労して暮らしている。自分たちはアジアの国や文化のことをあまり知らなかった。もっと知りたい」といった感想を述べられたことが印象的でもあり、「ああ、やってよかったな」と感じた一瞬でした。

その後私は世田谷ボランティア協会を退職し、あるNGOの駐在員としてバングラデシュに渡ることになりました。5年後に帰国した後、JCAの方からご招待されたことがありました。その時会員が300名近くで、数ヶ所の拠点に別れて活動を展開していることを知り、改めて驚きました。みなさんの努力があっての結果ですが、当時先の見えない活動を作っていった人たちの苦労を思い出し、胸が熱くなりました。その一人に加えていただき、今では心地よい思い出となっています。

日本各地には国際交流協会といった拠点が約900箇所に自治体などの協力で設立されています。それらの拠点では、日本語だけでなく、在住外国人の生活支援や相談、場合によっては人権にかかわる活動をしているところもあります。JCAは世田谷区でそういった活動のさきがけになっていきました。これからもそういった活動に刺激を与える団体になったらいいな、と勝手に期待しています。その時はまたお手伝いします。

これまで　そして　これから

(福)世田谷ボランティア協会
山崎 富一

世田谷ボランティア協会が発足して間もなく、協会の近隣の女性から在日外国人に日本語を教えたいので世田谷ボランティアセンターの会議室を貸してほしいと相談を受けたのが、ＪＣＡとの最初の出会いでした。

当時、世田谷区内には、国際交流のボランティア団体は少なかったので、協会としては喜んでご利用いただきました。その後、学習者が徐々に増え、週４回利用するまでになりました。

１９９０年代に入り高齢社会とともにシニア男性のボランティア希望者が徐々に増え、今日では多くのシニアボランティアの活動の場となっています。協会には、日々ボランティア活動希望者の相談が寄せられますが、そのなかには外国人と交流できる活動を希望される方もいます。こうした方に、ＪＣＡはとても貴重な活動先です。また、世田谷区職員のボランティア研修生や企業人ボランティア講座受講者の貴重な体験先となっています。３年前、１８年過ごした千歳船橋から下北沢移転に際しては、ＪＣＡの多くのみなさんに不安を与えてしまいました。現在の三軒茶屋には、ＪＣＡ千歳船橋に加えてＪＣＡ玉川が新たに加わりました。

国際化が進むなかで、日本で生活する外国人にとってＪＣＡの存在は大きな心のよりどころです。これからの活動の発展を期待しています。

ＪＣＡの足跡

・・・歴代の会長・副会長さんと共に、
この２０年の足跡をたどってみました・・・

会長・副会長就任時代

１９８９～９２	山口　三千也	
９０	佐々木　陽子	（副）
９３	トッテン知子	
９４	杉　　正樹	（副）
９５～９６	佐々木　和子	
９７～９８	坂本　高子	（副）
９９～００	成田　皓子	
２００１～０２	長野　一美	（副）

（以上の方に原稿を依頼し、回答のあった方のみ掲載いたしました。）

一九八九～九二　会長就任時代

山口　三千也

一九八三年に四人の主婦によって始められたＪＣＡは、ボランティアセンター（千歳船橋）の部屋を借りて教室を開いていた。私が入会した一九八七年三月には会員は七人のみであった。それが一九八九年の四月には三十三名となり、教室も火、水、金曜、夜も火曜と増えていった。

私がＪＣＡに入って一番驚いたのは、女性達の溌剌とした活動であった。年齢の違いを気にしない自由な会話、はっきりと自分の意見を述べる姿、積極的に行事に参加協力する姿勢。会社人間であった私が全く知らなかった楽しい世界であり、女性によるボランティア活動の素晴らしさを初めて知ったのである。

会長を引きうけることになった私は、この会の目的は何であり、どういう活動をするのかということを、はっきりと決めておこうと思った。

一九八九年四月一日に施行されたＪＣＡ会則の中の第二条「目的」と第三条「活動」の中にそれが明記されている。

団体の活動では、はっきりとした目的を持ち、それをどうやって活動に生かしてゆくのかが大事なことなのだ。日本語を教えるだけでなく、交流によって日本の文化生活を伝える事。例えば正月行事、雛祭り、お花見、端午の節句などに外国人を自宅に招いて日本の文化にふれさせる人も多かった。私も一九九〇年四月三日、私の家でお花見の会を開き、三〇人程が集まって歌や踊りを楽しんだ。

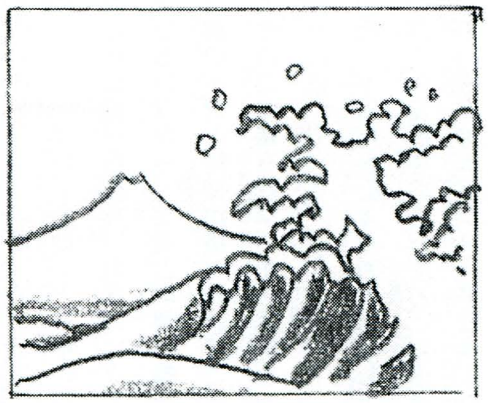
一九九〇年十月二十三日、地域バス見学会を行った。世田谷区役所が、バス二台を無償で提供してくれた。参加者六三名。五島美術館、次大夫堀公園、朝日新聞印刷所、等々力渓谷めぐりを楽しんだ。

一九九二年十月十三日のバス旅行は代官屋敷、郷土資料館、神代植物園、世田谷清掃工場見学を行っている。

一九九〇年九月にＪＣＡ玉川が発足することとなった。玉川の方に副会長

をおき、私の会長職は二年延長され一九九二年までとなった。一九九一年一月二十三日の調査では、千歳船橋の会員は五九人、登録外国人は一七一人、国籍数二七カ国となっている。会員、学習者の増加に伴って増やさざるを得ない会場をどうするか。今後ともこの問題は一番の悩みであろう。

「にほんごおしゃべりひろば」だけが唯一みんなが参加する会になってしまった。このところ会場を移さなければならない事情もあり、会員同士が話し合う機会が少なくなっている。もっとお互いに話し合う機会が欲しい。その中から新しいアイデア、自由な発想が生まれ、これからのＪＣＡの活性化につながっていくのである。



一九九〇

ＪＣＡ玉川開設にあたって

佐々木陽子［玉川］

日本では、まだボランティアという言葉が聞きなれない時代であった。渋谷の日本語養成講座で知り合った友人の紹介で千歳船橋にあるＪＣＡを私が訪ねたのは一九八八年九月であった。

当時ＪＣＡでは、火・水・金の三クラスで、手のひらサイズの国際交流の会であった。一月には、手作りの楽しい「おしゃべりひろば」四月には、山口会長さんの家でお花見会、授業の後には、みんなで食事会をもつなど、学習者との交流を大切にしている温かい会であった。私はこの小さなグループの中に真実のボランテイア精神を見たのである。

私が初めて出会った学習者は、来日したばかりの二八才のアメリカ人、ダニエルであった。彼も、私も玉川周辺に住んでいたので、千歳船橋には一時間かけて通っていた。ダニエルの「この辺にもＪＣＡのような楽しい会が欲しいです。日本語を勉強したい外国人が沢山います。」と云う言葉が私に、玉川立ち上げの気持ちを奮い起こさせたのである。

それから場所捜しに明け暮れたが、定期的に部屋を借りることは不可能に近かった。途方に暮れている時に、神の助けと言おうか、理想的な場所、玉川ボランティアビューローを発見し、しかも千歳船橋のクラスと重ならない月・木が空いていたのである。

一九九〇年四月の総会で、会の主旨と会費を変更しないという条件で承認され、その年の九月、二子玉川の地にＪＣＡ玉川が開設される運びとなった。賛同者の四人で準備会を何回も持った。ＪＣＡ創立の精神を失うことなく、しかも玉川独自の組織運営を作成した。

（一）学習者用の個人カルテの作成。

（二）会員の親睦と情報交換のためのミーティングを授業の一環とする。

（三）月一回、会員対象の勉強会の実施。

そして一年後には会報ＳＥＡＳＯＮＳを発行、曜日委員会も発足させた。二年後の十一月には、千歳船橋で経験したあの手作りの「おしゃべりひろば」を開催し、交流の喜びを分かち合ったのである。

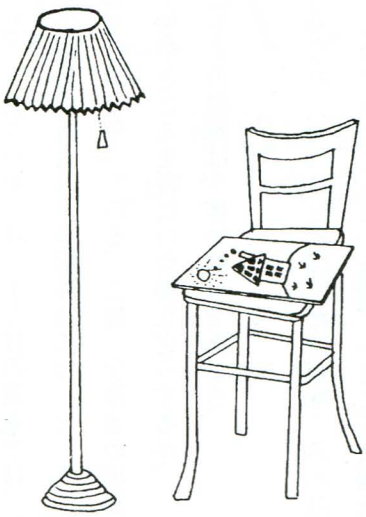
会員の皆様の情熱と努力そして力強い協力で、当初玉川ボランティアビューローを拠点にして月・木の二クラスで始めたＪＣＡ玉川は、僅か四年の間に、四クラスが増設され、会員・学習者合わせて三五〇人余りの大きな団体に発展し、現在に至っているのである。

ＪＣＡ玉川の設立にはＪＣＡ千歳船橋の温かいご

支援とご理解がなければ実現しなかったことで、心より感謝の気持ちでいっぱいである。十三年の間、広い世田谷の西と南に拠点を持ち、お互いに支えあい、良い所を学びあいながら、交流と理解の輪をひろげてきた。当初の主旨と精神が損なわれることなく成長し続けてきたこの稀有な草の根の民間ボランティア団体を誇りに思っている。

ＪＣＡ千歳船橋二十周年を心よりお祝い申し上げて、これからの益々の発展をお祈りする。場所を提供してくださっている玉川ボランティアビューロー、世田谷ボランティアセンター、八幡小学校、奥沢出張所に厚く御礼申し上げる。

我が家族の一員であったダニエルは、長く日本で生活し、日本を愛し、昨年日本女性の舞子さんと結婚し、日本のふるさとを発ち、アメリカに帰国した。



一九九四

平成初期・思い出すこと

杉　正樹

ＪＣＡの活動に参加するようになっていつの間にか十数年が過ぎてしまいました。入会当時は二〇名をわずかに超えた程度の会員で、千歳船橋にあった世田谷ボランティアセンター二階の一室をお借りして週二回の日本語教室を開き、世界各地からの外国人と日本語を通しての交流が行われていました。

その後開設されたばかりの玉川ボランティアビューローの部屋もお借りすることができて、活動も徐々に拡大してまいりましたが、一九九一年の湾岸戦争の頃から、日本人の間でボランティア活動に対する意識が次第に高まり、またその一方で日常生活でもっと日本語を使いたいと希望する外国人の数も増えてまいりました。

このような状況の下で、ボランティア協会の施設に依存しているだけでは教室の回数の増加にも限界があり、当時年四回開かれていた定例会等の場では、ＪＣＡの活動に参加したいという日本人、外国人の要望にどうすれば応えられるかについて、しばしば話し合われました。

企業も社会に目を向けるようになってきた風潮の中で、東京ガスがその施設の外部の人たちへの開校に好意的な事を知り、一九九一年の秋に「にほんごおしゃべりひろば」を世田谷支社（在桜新町）で開かせていただき、それを機に約十年にわたって日本語教室にも利用させていただくことになりました。

子ども達の減少で区内の小中学校では空き教室が増えていることを知りながら、外国人が多数出入りする日本語教室にはとても貸してもらえないだろうというのが会員大多数の意見でしたが、区教育委員会は案に相違してＪＣＡの活動に強い関心を示し、小田急線と大井町線の駅に比較的近く、かつ設備的に可能性のありそうな小中学校約十校を教えて下さいました。それ等の学校を個別に訪問して校長や教頭と面談した結果、特に積極的な理解を示された明正小と九品仏小で一九九三年に教室を開くことができるようになりました。

純ボランティア活動を旨とするＪＣＡにとっては、その後も安定した場所の確保がしばしば難題となりましたが、世田谷ボランティアセンターの移転を経て現在の姿で一応落ちついたかと思われます。

さて、この十数年間に私は文字通り世界各地からの百名を越す方々とひざを突き合わせて彼等の日本語上達のお手伝いをしてきました。ＪＣＡに通う外国からの方たちには、日本語学校で学びな

がらも学校では得られない日本語での日常会話の機会を求めたり、ほぼ完璧な日本語を習得した上で難解な専門書の解読を目指したりなど、様々な要望があります。形にとらわれることなく一人一人の希望を最大限に満たすように努めるのが日本語教室やその他のＪＣＡの行事の課題だと思います。

ＪＣＡが今後共このような活動を通していささかでも国際交流と相互理解に貢献しつづけられればと思っています。

一九九七～九八

楽しかった思い出

坂本　高子

玉川教室・佐々木陽子さん会長の時、「永年仲良くなんでも話し合える大切な方とご一緒できるのはうれしいなぁ」と千歳の副会長をお引き受けしました。会員数両方で三三〇名の大所帯、七箇所、十三教室、学習者三五五名。この規模によって生ずる不都合や基本理念の喪失についての不安など、玉川の柴田副会長と共によく話し合った事を思い出します。個々の教室が一人歩きせずに意志統一できていけるか、学習者の満足度をどうあげていくか、忙しさの中いつも考えていました。千歳教室の夏休み前は、計画、準備の期間で、秋には行事がたくさんありました。

まず、十月四日に行われたバス見学会。最初の曜日委員会で年間行事を決める際に、この事案をリーダーとしてやってくださる方がいたらやりましょうと提案。さっと手を挙げてくださった方が、金曜夜の大橋潔さんでした。大橋さんは五月の段階から検討を始め、いつ・どこへ・バス会社は・費用は・など頭の下がる調査をしてくださり、九月に入ってからは実際に見学場所に行かれ、雨天の場合の配慮、何種類かのお弁当の食べ比べ、本当に丁寧な事前調査に感謝し、私は事柄にあたる姿勢を学びました。

当日は都庁四五階展望室、サントリー武蔵野工場へ行き、ここでは試飲もあり嬉しかった方多数。その後小金井の江戸東京たてもの園でお弁当を食べ、緑豊かな園内を散策しました。学習者二四名会員一七名の参加でした。

十月十日は雑居まつりのバザーに会員有志が参加。地域と共に活動していくということ、ＪＣＡを知ってもらう機会として山口三千也さん中心で行われました。荷物の搬入に車の出入りしやすいのと人通りがあること、好条件の場所を確保された山口さんのご尽力に感謝でした。前日、多くの会員からの品物に値札つけをしました。これも楽しかった思い出です。

九月一六日から十月二三日に区の職員研修の受け入れをしました。会員一名が事前説明会に行き、活動内容と会のアピールをしてくるという大切な役がありますが、この年は渡辺美知枝さん（金）に行って頂きました。区職員九名が熱心に参加され、この後会員登録した方もいました。

この年十月一日から、けやきネットが開始。教室確保のため登録をしました。

一一月一五日に「おしゃべりひろば」を開催。金曜の会場担当の苦労話を。テレビで風船アートのチャンピオンを決める番組を見た会員（岩崎葉子さん）の発案で飾りつけは風船でやろうということになり、ソフトな色合いの風船を束ねてリボンで結んで飾る事になりました。ふわっと浮かせるのに水素ボンベで膨らませましたが、素人のこと最後は足りなくなり金曜のスタッフ全員でフーフーと大笑いの準備でした。壁に貼る飾り付けからこのときの立体（？）の飾りつけはとてもよかったと金曜スタッフの中では大いに盛りあがりました。たくさんの風船は、学習者のお土産になったことは言うまでもありません。

最後に忘れてはならないことは、ずっと場所の提供をして頂いていた世田谷ボランティア協会のことです。金曜は他の会と一部屋づつで何かと山崎さんに相談にのっていただきました。一階畳の部屋での学習はいい思い出です。いい経験をありがとうございました。

一九九九～〇〇

全員一致で教室移転

成田　皓子

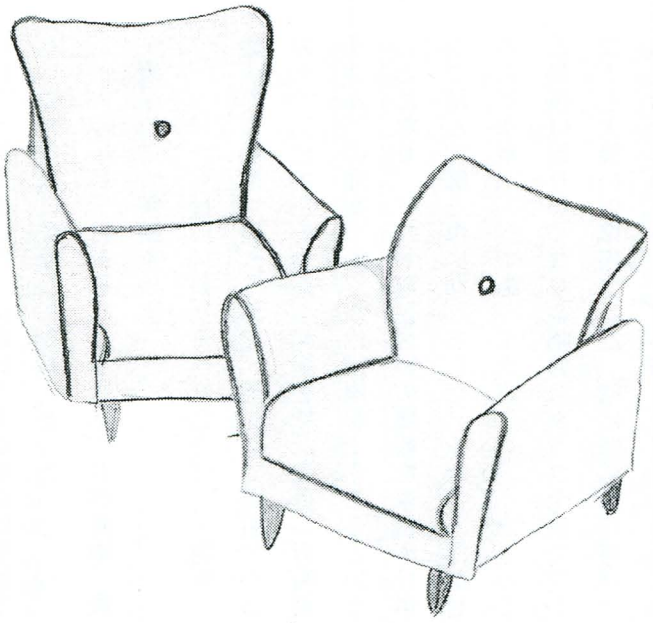
何かをするために人が集まれば、人の数だけ考えが集まる。それを知恵と受け取るか、自分勝手と受け取るかは、まとめ役の力量にかかってくる。歴代のＪＣＡ会長・副会長はそれを知恵と受け取り、独自の個性の協力と受け止め実践に移した。そのことが四人から始まったＪＣＡを今日の大きな団体にした。

私が会長になった時には、ＪＣＡを運営するのに必要な完備した記録が作成されていた。ＪＣＡ千歳船橋の実質的な運営責任者である小谷副会長が、それに基づいて曜日委員に諮り、年次計画の立案、実行や問題点の解決に当たっていた。千歳船橋と玉川共催の「日本語教え方講習会」については、年度はじめに「音声」講師王伸子専修大学助教授と決め、無事終わり、後は次年度の役員を決めればお役ご免になる筈だった。ところが二月の終わりボランティアセンターの下北沢移転が突然告げられた。「教室あってのＪＣＡ活動」なのでこのことは大ショックだった。継続するためには五教室をどこかに移さなければならない。条件は①千歳船橋周辺②五教室纏まる③費用は安く④恒常性を保つ⑤しかも緊急にだった。仲間内で用意することは不可能なことだ。会長、副会長とで区役所障害福祉課の前田係長、ボランティア協会の牟田悌三会長らと話し合った結果、笹原小学校が五教室纏めて引き受けてくださった。ＪＣＡの大きな試練の際に多方面から差し伸べられた手を忘れることはできない。又、移転に基づく空白がないようにと様々な手配をしてくれた小谷副会長には感謝している。

緊急避難の形で借りていた笹原小にも、他校同様に、学童の為のＢＯＰが近い時期に開設されることが決まっていた。教室移転先を早急に考えなければならない。学校・ＰＴＡの双方が譲り合って使用しているミーティングルームを、週四回（除・金夜）借りるのは、学校側にとっても問題があった。ＪＣＡの窓口になった衛藤副会長と教頭先生との話し合いのなかで、早急に教室を明け渡す必要に迫られた。臨時曜日委員会を開き検討した。「一部の教室移転止むなし。可能な場所を探し、会員・学習者の希望を十分に考慮する」を条件で意見は一致した。二教室を残して教室移転は年内に完了した。

多くの人に苦労をかけたが、「教室あってのＪＣＡ」を理解し全面的に協力してもらえたことは、会員の大人の知恵の凄さを再確認した。移転した下北沢も二年後には下馬に移ることに決まっており、一時逃れのような形で次に引き継いだことは心苦しかった。今後の課題は自分たちが何時でも自由に使える場所を確保することだと痛感した。

実質責任者小谷・衛藤両副会長の多大な協力と曜日委員、会員全員の力を誇りに思っている。



二〇〇一～〇二

教室移転に終始した二年

長野　一美

二〇〇〇年世田谷ボランティアセンター仮移転に端を発した騒動を引継ぎ、二〇〇一年度は世田谷ボランティアセンター下馬移転開設に伴う下北沢三教室（火・水・金夜）移転、二〇〇二年度は「新ＢＯＰ」開設のため笹原小学校三教室（木・金・金夜）の移転が最大の課題でした。二〇〇〇年度はボランティアセンターの五教室（火・水・木・金・金夜）は千歳船橋の地に残るべきだという総意が得られ、各方面の方の協力により笹原小学校に全教室移転したと聞いていました。その後ＪＣＡはボランティアセンターを拠点にする方が活動しやすいという方針が加わり、混乱していました。

二〇〇一年度、二〇〇二年度の教室移転を考える時、地域に残るべきか、ボランティアセンターと共に移るべきか、会員の合意は全くありませんでした。ボランティアセンターと共に移る方が新たに会場を見つける労力も要りません、ボランティアセンターも快く受け入れてくださることは明らかでした。しかし、学習者からのみならず、地域に残りたいという会員からの要望が非常に根強いことも事実でした。草の根の国際交流ボランティアに必要な地域性を無視することはできません。

二〇〇一年度、先ず北沢タウンホールに残りたいという願いはどこにも通じませんでした。世田谷区役所関係部署へ陳情に行ったものの全く脈はありませんでした。移転対象教室の曜日委員と一緒に小田急線沿線の区立小学校、ボランティアビューロー、そして建設中のボランティアセンターまで訪ね歩き、教室毎に報告し、話合いを重ねました。その結果、火曜教室は北沢小学校へ、水曜教室は下馬のボランティアセンターへ、金曜夜教室は代田ボランティアビューローへ木曜日夜に変えて移転先を決定しました。

二〇〇二年度の移転は予想よりも早く来ました。二〇〇四年度笹原小学校に「新ＢＯＰ」開設が決定したので二〇〇三年三月までに移るように通知を受け、半年で移転先を決めなければならなくなりました。ここでも前年と同様、若しくはそれ以上に地域に残りたいという要望が絶大でした。再び候補になりそうな様々な施設を訪ね歩きまわりました。受入れ可能な会場を報告し、各教室で話合って、木曜教室は代田ボランティアビューローへ、金曜教室は砧図書館会議室へ、金曜夜教室は船橋中学校へ移転先を決定しました。

火曜教室については北沢小学校との約束は反古なり、二〇〇二年十月移転を申し渡されました。笹原小学校教室と一緒に移転先を考えようとしましたが、教室で話合いの結果、これ以上移転を繰り返してはいけないという結論を出し、ボランティアセンターへ移転を決定しました。

教室移転を考える際に「けやきネット」の利用による教室の開設が浮上しました。具体案まで考えた教室もありましたが、恒常的に教室を設置するには不確実な要素が大きすぎ、利用料の負担は長期にわたると会費の値上げを考えざるを得ない点で検討対象から除外しました。

教室移転という大問題を抱えながら教室活動は常日頃と変わりなく続け、「おしゃべりひろば」はいつも以上に熱意を傾け、盛会に終わることができま

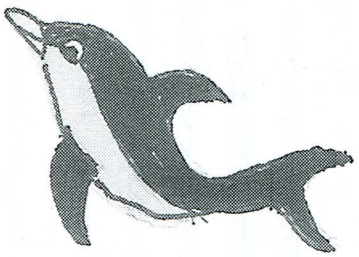
した。全会員の理解と協力があったことはもちろんですが、その間曜日委員は移転先を決めなければならないという使命を負わされながら、安定して教室を継続させるために腐心してくださいました。そのご苦労は忘れてはなりません。教室移転を成し遂げるために共に考え、共に行動したことはボランティアグループであるＪＣＡのあり方にもっとも相応しい姿であったと思います。

教室移転はすでに様々な影響を与えています。一旦会員、学習者共に減少しますが、それまでＪＣＡの存在を知らなかった地域の方が加わって活況を呈するようになるはずです。ただし、自然に増加するのではなく、地道な努力が認められるからです。また、教室が分散することによって千歳船橋で身を寄せ合っていた当時には考えられなかったことですが、教室ごとの意識の乖離が顕著に現れ始めています。教室単位に活動してもＪＣＡの一教室には変わりないのであって、個別のＪＣＡが作られていくことは避けなければなりません。曜日委員会を核に基本的な考えだけは共通に保持する努力が必要です。

教室移転の顛末を振り返って、幸いにも経験のある曜日委員の方々と一緒に取り組めたからスムーズに淡々と解決の方向に進むことができたと思っています。将来もう教室移転など経験しないで済むことを願いますが、ＪＣＡの課題を解決するには役員の毎年交代制、経験の浅い会員でも曜日委員を引き受けなければならない状況などを含めて運営形態を考えなければならない時期に来ていると考えます。

それから教室を受入れてくださったボランティアセンター・ビューロー、区内小・中学校、砧図書館には感謝の気持を忘れずに、単に教室として利用するだけではなく、各会場の催し物に積極的に協力するのは当然です。さらに、教室移転の副産物としてＪＣＡの存在が多くに知れ渡り、国際交流事業への協力依頼が押し寄せてくるようになりました。できる限り応えたいと思いましたが、現ＪＣＡの活動の範疇ではこなせず、個人の力では限界があります。このような要請に応えることをＪＣＡの活動に積極的に取り入れるのかどうか合意を問うて、そうするのであれば会員の協力体勢を築く必要もあります。

教室移転と取り組む間に、内在する課題が多く積み残されていることにも気づきました。そして、今何かしら不協和音が聞こえてくるのも「伝えられていない」ことが原因であると気づきました。そこに手をつけることによって遥かに改善されるであろうということは分かりましたが、現実は教室移転で手一杯の上、力不足のため与えられた期間ではこなせませんでした。



広報誌の軌跡

風また風　JCA記念会報　第32号　1998年5月

「風　また　風」第1号の頃

佐々木和子（水）

広報誌「風また風」は１９９２年５月に第１号が発行されました。’８０年代末頃からの、ジャーナリズム用語というか、経済用語といえばいいのか、円高、バブル現象の始まりが世界の国々からの注目・関心の眼を日本に集める事になったのでしょうか、それまでＪＣＡの外国人会員はアジアの国々、韓国・中国・タイ・マレーシア等からの駐在員とその家族の方達、少数の留学生の方が殆どでした。

’９０年に入って欧米の国々からの会員も増え始め、その外国人会員の方達の「日本語を学ぶ」という中味も、生活に必要な基礎的、日常会話を学びたいから、もう少し踏み込んだ、日本への興味、知識へと範囲が広がりました。教室での会話も初級から中級へと進む中、お互いの生活、文化に触れた話し合いもかなり出来るようになり、活気に溢れた教室風景になってきました。

定例のミーティングには面白い場面も紹介され、世界の様々な国からの風が吹き始めました。そんな時間の中にいた事が私の内なる風を起こしたということでしょうか。

こんな愉しい風景をそのまま見過ごしてしまうのは惜しい、なんとか書き留めたい、の思いに駆られ、ミーティングで提案、反応はいろいろでした。話題は提供する、でも書くのは困るという大勢の中で、習い始めたワープロを打つ事がお手伝いできるならという種橋さん（水）の言葉に力づけられ、これだけの後押しがあれば通信発行は可能と、先ずは水曜日通信を、と決めました。

そして、風はボランティア（センターも含めた）の周りにも吹き始めていたのです。

「風また風」Ｖｏｌ．１にはその辺の事を書いています。１９９２年４月１６日、朝日新聞夕刊の世田谷ボランティアセンター紹介の、国際交流に関する記事に対して１００件を超す問い合せがあり、その対応に大わらわの様子を会員の皆さんに伝えています。しかし、その４月の時点ではまだＪＣＡには広報誌はなかった。初代会長、副会長、を勤められた山口さん、杉さんが規模が急に大きくなりつつあったＪＣＡの土台造りをなさっていました。その流れの中で、かなり個人紙的発想で考えていたものが、全体の広報誌にと横滑りしていく事になったと記憶しています。

Ｖｏｌ．１に上記の公的な記事を書いたのも、気配り欠乏症候群の私にしては、出来るだけ公的なものを、と考えた結果だったと振り返って思います。

改めてその発行の経緯を書いてみると、ただこれだけのことです。やや抽象的ですが、風が吹いて、背中を押して、叉風が吹いて、それが新鮮であったことが、更なる風になったと思います。

（ＪＣＡ会報　第３２号
１９９８年５月　より抜粋）

歴代の広報委員

1991～94	佐々木　和　子
94～97	吉　川　みのり
98～99	山　口　三千也
2000～01	松　澤　一　平
02～03	泉　　薫

91
94

コペルニクスの風

佐々木和子

二〇〇三年七月、水曜明正小教室で、小さなケーキを賞味した。「コペルニクスの生まれた町、トルンのです。」という。「え、あの地動説のコペルニクス?ポーランド人?」私のPCに小さなe-mail風が吹いた。六人の友人に、「コペルニクスがポーランド生まれと知っていた?」と送った。応えは、「はい、勿論」が二名、「いいえ」が一名、三名は不明瞭、この中には、「あなた知らなかったの?」を書かなかった心暖かさも思える。ある友人は、「ポーランドの天文学者、イタリアに留学。牧師を希望し、かつ医学を修めたが、天文学、数学に対する愛好の心を深くした。中世の階層秩序的宇宙観を打破し、・・・」(理化学辞典)と更なる資料を添えてくれた。彼が天文学者であると同じに宗教家であったと知った。私の学習者、二七才の若きポーランド人は、コペルニクスが、Bishopであったこと、であったが故に保守的な宗教会との軋轢、更には弾圧にも苦しんだのです、と話した。五百年前のその地を、その人生を思った。その苦難は、近代への大きな礎になったのですね、とうなずき合った。

一九九二年五月、「風また風」はJCA広報誌一号が発行された。詳細は九八年五月号に書いているので省くが、八〇年代後半からアジア各国の外国人に加えて、欧米の国々からの会員も増え、水曜日教室のミーティングの毎に、私の中の風は大きくなって行った。同じ教室の種橋淑江さんが習い始めたワープロで、サポートを申し出てくださり、個人誌で始めるつもりであった処、副会長杉さんの、「未だ広報誌のないJCAにそれを。」のお言葉で、風は文字になった。

二〇〇二年、二〇〇三年、globalizationという文字の中に、戦いの風の匂いも漂い始めているような・・・まだ、まだ解らないことばかり。あなたの周りには、どんな風が吹いていますか?

94
97

心に残る人々

吉川　みのり

九三年、日本の米は大凶作だった。緊急輸入されたタイ米が、翌年一般家庭にも出まわり始めた。タイ米は粘りがなく少々癖もあって不人気だった。そこでJCAに来ているタイの人達に協力してもらい、タイ料理の講習会を催すことになった。私はそれまでタイ人を担当したことはなかったが、関西弁のような柔らかい言葉が、秋田のしょっつるによく似た味のスープが好ましく、急速にタイ国に親近感を覚えるようになった。

料理の講習会でひとつだけ忘れられない情景がある。それはタイの女性の一人が、まるで我が子を慈しむかのように、真っ白に炊き上がったご飯の上に手をかざし、ゆっくりと撫でるように円を描いていた仕種だ。一目でそのタイ米がタイの人達にとって極上米なのだと判った。そんなタイ米を私たち日本人は粗末にしているんだ、と胸がチクリと痛んだのを覚えている。

Rはミャンマーから来た三〇歳くらいの青年。一・二度しか担当したことがなかったが、帰国前に広報に寄稿してくれるということで、文章作りを手伝いながら、親しく言葉を交わすことができた。父親が中国系。教育熱心で兄弟三人共、理系の大学を出ている。末っ子の彼には、大学時代英語の家庭教師もついていたという。長兄が台湾でホテルマンをしている関係からか、彼には台湾人の友達が何人かいた。その中のひとりから、彼はその時は居酒屋のチェーン店で、アルバイトをしているということだった。帰国後彼は電気器具商をするんだと言って、既に作ってあったミャンマーの住所を刷った名刺をくれた。書き終えて後、私の国名は「ビルマ」にして下さい、と言った。彼に初めて出会ってから約四年、母国に対する彼の気持ちに何か変化が

あったのだろうか。あるいは母国に何らかの変化があり、それに彼が敏感に反応したのだろうか。あれから数年、ミャンマーに関するニュースが極端に乏しい中、彼の商売もうまくいっているだろうかと、時々心配している。

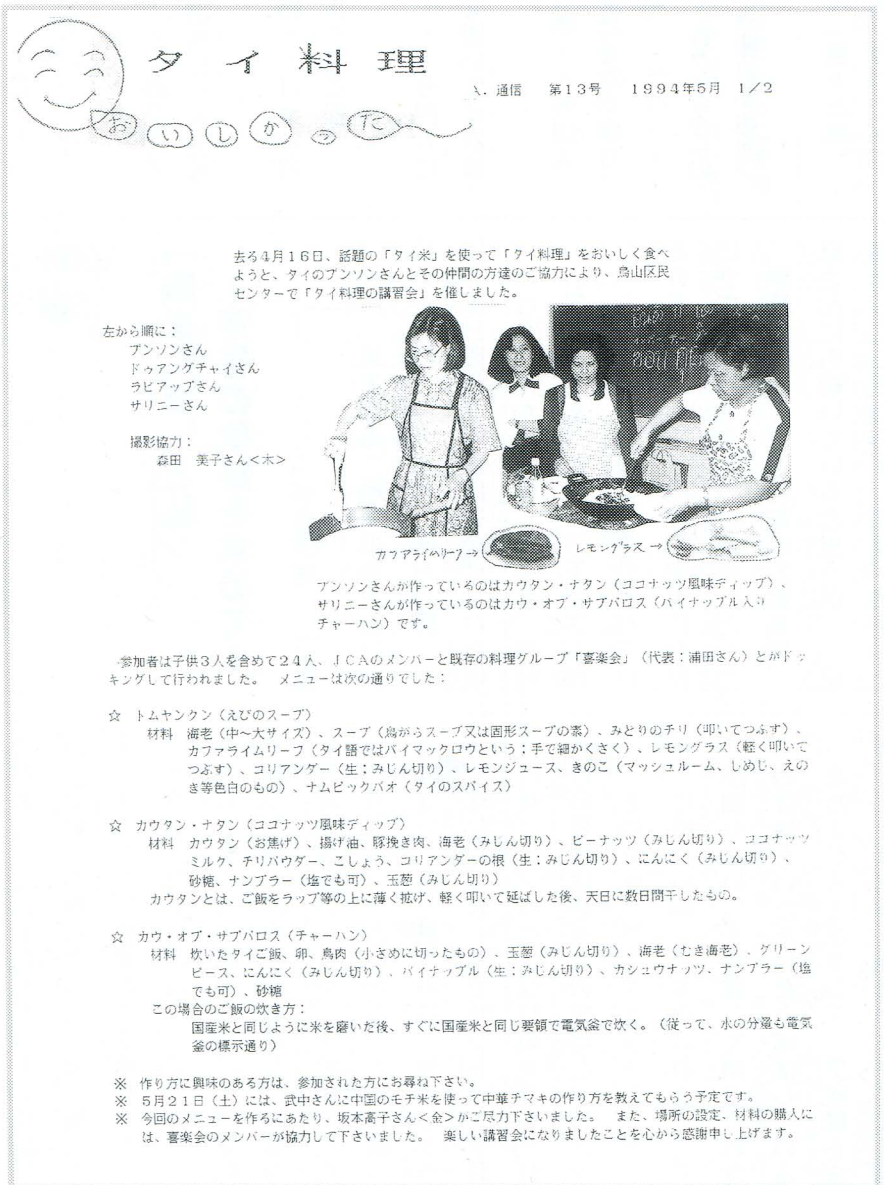
ＪＣＡで最後に担当したのは、三十二歳の中国女性乙だった。彼女は、保育所が未だ決まらないので、と四歳の女の子を連れていた。彼女は一年余り前に家族と共に来日し、こちらに来るまでは富山に住んでいたとのことだった。彼女はその間に日本語を独習し、既に二級の試験に合格していた。日本語はほぼ完璧で、私の出る幕ではなかったが、彼女は話し相手と一級試験へのアドバイスを求めてやってきたのだ。

日本人は天皇がいて、誰もその上に立つことは考えないでしょうけど、中国人はいつでも誰でもいつかは自分が皇帝になろうと考えているんです。中国は漢民族が九十五％で、夫は漢民族です。私は少数民族出身ですが、私だっていつかは皇帝になってやろうと考えているんです・・・・

彼女の横顔をつくづく眺めながら、中国人の底力を思い知ったのだった。その後子どもが保育所に入り、彼女は仕事も始めた。どうしても私との日に来られないとき、彼女は私を他の人に取られるのは嫌だと言って、私にも休めと言った。彼女の気迫に負けたのか、毒気にあてられたのか、彼女が仕事でどうしても来られなくなったと言ってきた時をきっかけに、そろそろ怠け心がもたげ始めていたので、ＪＣＡをやめることにした。

乙は、仕事のない日は保育所のそばの図書館で猛烈に日本語の勉強をしていたようだ。その年、一級に合格した。まもなく翌年、米国へと渡って行った。今インディアナポリスに住んでいる。

ＪＣＡで一回限り担当した人を含めれば、一体何人の人たちと出会ったことだろうか。一人一人は個性は違っても、皆それぞれに国家とか血の絆とかを背負って懸命に生きていた。その中でも心に残る人達は、彼等が残した言葉を通して、私も彼等に対して、日本を自分自身を映し出していたのだと気づかせてくれた。ＪＣＡで過ごした時間が、お互いにお互いの姿をお互いの心に刻みながら付き合う、ことの大切さ、楽しさを実感させてくれたのだった。そういう貴重な体験の場を提供してくれたのが、ＪＣＡ、だった。



夕　イ　料　理

おいしかった

通信　第13号　1994年5月　1/2

去る4月16日、話題の「タイ米」を使って「タイ料理」をおいしく食べようと、タイのプンソンさんとその仲間の方達のご協力により、鳥山区民センターで「タイ料理の講習会」を催しました。

左から順に：
プンソンさん
ドゥアンゲチャイさん
ラビアップさん
サリニーさん

撮影協力：
森田　美子さん<木>

カファライムリーフ→
レモングラス→

プンソンさんが作っているのはカウタン・ナタン（ココナッツ風味ディップ）、サリニーさんが作っているのはカウ・オブ・サブパロス（パイナップル入りチャーハン）です。

参加者は子供3人を含めて24人、ＪＣＡのメンバーと既存の料理グループ「喜楽会」（代表：浦田さん）とがドッキングして行われました。　メニューは次の通りでした：

☆　トムヤンクン（えびのスープ）
材料　海老（中～大サイズ）、スープ（鳥がらスープ又は固形スープの素）、みどりのチリ（叩いてつぶす）、カファライムリーフ（タイ語ではバイマックロウという；手で細かくさく）、レモングラス（軽く叩いてつぶす）、コリアンダー（生；みじん切り）、レモンジュース、きのこ（マッシュルーム、しめじ、えのき等色白のもの）、ナムピックパオ（タイのスパイス）

☆　カウタン・ナタン（ココナッツ風味ディップ）
材料　カウタン（お焦げ）、揚げ油、豚挽き肉、海老（みじん切り）、ピーナッツ（みじん切り）、ココナッツミルク、チリパウダー、こしょう、コリアンダーの根（生；みじん切り）、にんにく（みじん切り）、砂糖、ナンプラー（塩でも可）、玉葱（みじん切り）
カウタンとは、ご飯をラップ等の上に薄く拡げ、軽く叩いて延ばした後、天日に数日間干したもの。

☆　カウ・オブ・サブパロス（チャーハン）
材料　炊いたタイご飯、卵、鳥肉（小さめに切ったもの）、玉葱（みじん切り）、海老（むき海老）、グリーンピース、にんにく（みじん切り）、パイナップル（生；みじん切り）、カシュウナッツ、ナンプラー（塩でも可）、砂糖
この場合のご飯の炊き方：
国産米と同じように米を磨いた後、すぐに国産米と同じ要領で電気釜で炊く。（従って、水の分量も電気釜の標示通り）

※　作り方に興味のある方は、参加された方にお尋ね下さい。
※　5月21日（土）には、武中さんに中国のモチ米を使って中華チマキの作り方を教えてもらう予定です。
※　今回のメニューを作るにあたり、坂本高子さん<金>がご尽力下さいました。　また、場所の設定、材料の購入には、喜楽会のメンバーが協力して下さいました。　楽しい講習会になりましたことを心から感謝申し上げます。

98
99

広報委員

山口　三千也

広報誌「風また風」の発行には第三二号から担当しました。先ず大きさをＡ３からＡ４に変え、題字を木曜日の佐藤恒子さんにお願いしました。これが現在の「風また風」です。

また、字を小さくしても読み易いように、Ａ４を縦に二分割にしたが、ワープロが打ちにくく四号だけで元に戻しました。

二ヶ月おきに発行するというのはなかなかいいもので原稿集め、編集発行がやり易く、ページ数が増えても問題ないのです。

一九九九年発行の第三八号には、読み易く、組み易くするにはどうするのか、その悩みが表れています。原稿依頼してもなかなか集まらないのです。それで皆さんが書くヒントになる六つのことを考え、発表しました。

1・思い出アルバム・・・教えている外国人の話にびっくりしたことなど。

2・アイデアポスト・・・各クラスで一ページづつ担当したらどうかな？

3・なるほどそうか帖・・自身の名アイデア。他の人もなる程そうかと納得。

4・私の見た日本・・・・外国人にお願いするとすぐ書いてくれるのですね。

5・あの人からの贈り物・・外国人との交流の中でまたとない贈り物となったあの話。

6・クラス便り・・・各クラスこの二ヶ月の活動。各曜日が担当。短い文とする。

これをヒントに皆さん「風また風」のアイデアについて話し合ってみてください。

00
01

「風また風」と私
―連帯の軌跡を求めて―

松澤　一平

私が「風また風」編集のお手伝いを始めたのは一九九八年　四月以降、当時の曜日委員会の書記を命ぜられた頃ではなかったかと記憶している。当時の広報委員であった山口三千也さんが、たった一人で原稿集めに苦労されているのを目前にして、内容の充実にお役に立てればと考えたのが始まりだった。

原稿集めの苦労は現在の広報委員、泉さんにも続いていると思うが、「定期発行にこだわらず、原稿が集まった時点で発行すればよいのでは」とのご意見も当時はあった。しかし各曜日には月例会、曜日委員会、そして年二回の総会があるものの、元来会員と学習者が孤立して学習する日常にあって、「風また風」は会員の連帯をもう一つ深める存在なのではなかろうか？多国籍の文化を背景に様々な環境で育った学習者と、これまた夫々の人生経験を持つ会員との触れ合いの中で、機会さえ与えられれば生まれた文章がインパクトを与えない筈がない。そう考えてあちらこちらにお願いした三～四年間であったが、固辞される方々にも多少の無理をお願いしたが、不快感を持たれた方があったとしたらお許しを願う他はない。常々思うのは、仲良しクラブではなく、あくまで学びを志す学習者に対し、プロにはなれぬまでもそれだけの根性は必要なのではと言うことだ。その意味で竹増美智子さん（水・夜）には長い間「日本語の教え方：そこが知りたい」を連載して頂きそれなりの評価をいただいたと確信している。

またＪＣＡでボランティア研修を実習された世田谷区職員の方々による感想、面白い自分史の矢吹敦司さん（火）、学習者の思い出「あの人からの贈り物」の山口三千也さん（木）、真摯な提言を続けてくださった元会長の成田皓子さん（金・夜）などなど挙げたらきりのない多くの貴重な原稿をいただいた。

面白かったのは二〇〇一年の「おし

ゃべりひろば」特集号の英国人、アビイ・サニアさんの「前橋へ行きたい」だった。日本語の上手なサニアさんは原稿なしでスピーチを終えた。そのような場合を想定してテープを回していたが何故か録音されていなかった。さあ大変と、担当の寺沢宣子さん（水・夜）と記憶を頼りにスピーチの再現に取り掛かった。本人が現れれば確認できるのに何故か教室に現れず、連絡も取れない。結局時間切れで、スピーチは印刷された。話は所用で前橋に向かうサニアさんが切符を買うために列の後方に並びながら、行き先の申し込みを練習していた。「前橋へ行きたい、前橋へ行きたい」と独り言を喋る度に、前に並んだ人が順番を譲ってくれ、とうとう二番目まで来た。しかし一番前にいるビジネスマン風の男には、私も急いでいるのでと断られたと言う、何ともおかしな話だった。

またドイツ人医師のウースラ・ギュンシュさんが「世界には甘やかされている存在が三つある。一番目が英国の犬、次がアメリカ人の女性、そして三番目が日本の亭主」というのもおかしかった。

水曜日のクラスでは曜日委員の種橋淑江さんが即席俳句教室を開き、テレビを通じ宇宙飛行中の向井千秋さんが「無重力‥‥」と上の句を詠んで、下の句を募集したのに応募することになった。学習者十数名が応募し、入賞こそなかったが向井さんから各人に礼状が届き学習者たちが大喜びした記事も懐かしい。

聞くところによるとJCAも二十周年ということだが「風また風」の一号、一号こそJCAがたどった軌跡そのものであり、それが今後も永く続くことを願っている。

02
03

広報委員の意義

泉　薫

小さい頃から物を作るのが好きだったので、何かお役に立てればいいなぐらいの気楽な気持ちでお引き受けしました。しかし「JCAの広報誌とはなんぞや」と基本的なこともわからず、保管されている歴代の会報誌を読み返してのスタートでした。山口三千也さんの「六つのヒント」は今でも基本にしています。その上、JCA在籍三年の私では会員のみなさんのことが何もわからなかったので、どなたに、どのような記事をお願いしてよいものか、無理強いしても申し訳ないな・・・となんとも頼りない広報委員です。しかしながら、以前に比べると印刷機がずいぶん発達していたので写真を増やすこと、そして会員同士の連絡用にと「掲示板」のページを新たに作ってみました。「おしゃべりひろば」の表紙にもカラーコピーを使い会計さんを困らせました。それが二〇〇二年です。

そして今年、ようやく一年間の流れがわかったので、もう少し内容を充実させようとあれこれ企画を考えていたら、なんと二十周年という節目に当たってしまった！と気がついたのは後の祭でした。八月に会長から「広報委員の責任において『風また風　二十周年記念誌』を発行してほしい。」と言われ、絶句。広報委員として何ができるのか考え悩みました。そんなとき、芹澤さんが「チャンスを生かしてやってみたら」と後押ししてくださり、前向きに考え、発行を決意しました。それからは創立当時の皆さんと連絡を取り、座談会の設定、歴代の会長、副会長、広報委員の方々や玉川の方々、外部の方々へ原稿を依頼し、保存されている写真の収集、選択、四社の印刷屋さんから見積り取り等精力的に動き始めました。それでも「これでいいのだろうか」という不安はいつもありました。プレッシャーで、放り出したくなったこともありました。そんな時、「一人でよく頑張っているね」と声掛けしてくださった横堀さん、山内さん（会計）

の「予算は大丈夫です。」との力強いお言葉。芹澤さん、浅野さんの「いつでもお手伝いしますよ」等の励ましに何度も背中を支えられました。そして、座談会の話しの中や続々と集まってくる原稿から、さらにアイデアが浮かび、記念誌らしく中味が充実してきました。玉川の方々からは、すばやい対応で原稿とエールが届き、伝達と共同力のすばらしさに感服しました。

みなさん方がこの二十年の道をひも解き、私を導いてくださいました。一番心配していた予算も、曜日委員さん方に承認していただき、みなさん方のおかげで、完成にまでこぎつけたことに感謝しています。ありがとうございました。

この記念誌が一人でも多くの方に喜んでいただけたら幸いです。

2002年おしゃべりひろば特集号より（写真撮影　後藤さん）

風また風　のみなさんへ
『SEASONS』の仲間たちより

★　20周年記念会報発行、おめでとうございます　★

一生懸命努力して日本語を習い、日本を知ろうとしている生徒さんの、少しでもお役に立ち、励みになる助けとなるような、広報誌作りに、お互いに頑張りましょう。

JCA 玉川　三軒茶屋教室・玉井　真寿美

★　祝!! JCA 千歳船橋２０周年「風また風」★

さて次の２０年。Aをえらびますか、それともBをえらびますか？　この機会に皆さんで話し合ってみてくださいませんか。目標を決めてさらに歩き出しましょう。

A　費用の安い良心的な、しかし言葉だけを教える日本語教室。

B　日本語学習だけでなく日本での生活全般のガイドとして、さらに日本文化の紹介にも力を入れて、もし仮に歴史認識に偏りがある場合には正しく理解してもらい、真の親日家の育成に役立つことを目標とする教室。

JCA 玉川　土曜クラス・上田　正明

★　文化の狭間－すれ違い　★

私たちの JCA の活動において、学習者に対して生活慣習など多くの面で「なんでそんなことを？」「わがくにでは…」「常識で考えても…」と思うことがしばしばあります。
価値観の違いをいかに埋めるか、近づけるかではなく、違いを違いとして認めあう。
その上でその違いを文化として尊重する心と、相手に対するやさしさがあって、はじめてその違いを楽しむことが出来るのではないでしょうか？
JCA 千歳船橋と JCA 玉川も、その違いを楽しみあい、お互いに学び会える兄弟として成長したいですね。

JCA 玉川　八幡小教室・金川　一郎

★　JCA の“顔”★

先日、数年来の肩の錘を下ろしてホッと振り返ってみる、そんな一言を教えて頂きました。「日本語教育とは、心の安らぎ・心の安定のためにある」。そこには、自分達が容易には理解できない言語を駆使する人達に囲まれて、“外国人”と呼ばれながら生活する事の想像を超える大変さが感じられます。そんな中での、広報誌の役割は何でしょう。
会員同士の、更には会員と学習者間のコミュニケイティングのお手伝い。（出来ているのかな…？）広報誌は外部へ向けての“顔”と仰る方もいらっしゃいます。（ミリョクは充分かな…？）JCA 玉川の SEASONS に携わる者の一人として、いつも“？”の連続です。

JCA 玉川　月曜クラス・小倉　通子

2003
スの顔

名　学習者数128名

木

代田V・B
13：00 ～ 14：30

木・夜

代田V・B
19：00 ～ 20：30

金

砧図書館
10：00 ～ 11：30

金・夜

船橋中学校
19：00 ～ 20：30

2００ クラス

会員数97名　学習

月　代田Ｖ・Ｂ
10：00 ～ 11：30

火　世田谷Ｖ・Ｃ
10：00 ～ 11：30

水　世田谷Ｖ・Ｃ
10：00 ～ 11：30

水・夜　明正小学校
19：00 ～ 20：30

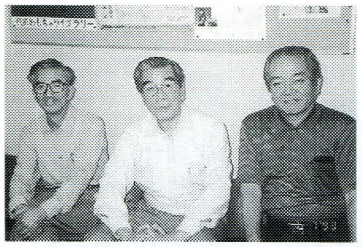
20年のご支援ありがとう！

ＪＣＡが20年もの間活動を続けてこられたのは
皆さんからの会場提供のご協力・ご支援が
あったからこそです。
ありがとうございました。
これからもよろしくお願いいたします。

JCAの歩み

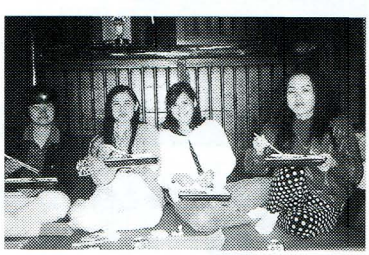
’８３.０９……ＪＣＡ設立
’８８.０５……日本語教授法勉強会　於世田谷ボランティアセンター（経堂）
’８８.０８……東京ボランティアセンターの助成を受けパンフレットを作成　2000部
’８９.０４……会長　山口三千也
’８９.０４……ＪＣＡ会則施行
’９０.０１……にほんごおしゃべりひろば　於東京ガス世田谷支社
’９０.０４……山口三千也宅にて「お花見会」開催
’９０.０９……玉川ＶＢに教室を開設　月曜、木曜
’９０.１２……にほんごおしゃべりひろば　於東京ガス世田谷支社
’９１.０４……ＪＣＡ会則一部変更
’９１.１０……にほんごおしゃべりひろば、世田谷ボランティア協会10周年記念行事と共催、
於東京ガス世田谷支社
’９２.０１……新年会開催　於世田谷ボランティアセンター
’９２.０４……世田谷ＶＣに木曜昼クラスを開設
’９２.０４……JCA会則一部変更
’９２.０７……ＪＣＡ通信「風また風」1号発行　広報委員　佐々木和子
’９２.０９……世田谷区職員ボランティア研修生受け入れ
’９２.１０……世田谷区巡りバス見学会　代官屋敷、神代植物公園、世田谷清掃工場
’９２.１１……にほんごおしゃべりひろば　於東京ガス世田谷支社
’９２.１１……世田谷ボランティアセンター（経堂）から代田ボランティアビューロに
火曜夜のクラスを移動
’９３.０１……世田谷区社会福祉協議会より活動に対し表彰される
’９３.０２……１２チャンネル「風は世田谷」にＪＣＡが紹介される
’９３.０３……東京都社会福祉協議会の助成を受けパンフレットを作成　２０００部
’９３.０４……会長　トッテン知子
’９３.０９……明正小学校に水曜夜クラス開設
’９３.０９……世田谷区主催の日本語ボランティア養成講座にＪＣＡとして団体参加
’９３.０９……世田谷区職員ボランティア研修生受け入れ
’９３.１０……バス見学会、森ケ崎水処理場、岡本民家園、等々力渓谷
’９３.１１……にほんごおしゃべりひろば　於世田谷ボランティアセンター（経堂）
千歳船橋単独開催となる
’９４.０３……講演会　於三軒茶屋しゃれなーど　講師　任都栗暁
’９４.０４……副会長　杉　正樹
’９４.０４……広報委員　吉川みのり　佐々木和子
’９４.０４……東京日本語ボランティアネットワークに加入
’９４.０４……ＪＣＡ会則一部変更
’９４.０９……世田谷小学校に木曜夜クラス開設
’９４.０９～１１…世田谷区主催の日本語ボランティア養成講座にＪＣＡとして団体参加
’９４.１１……ＩＡＶＥ世田谷会議主催　「ぶらり世田谷ウォッチング」に
参加外国人と近隣を散策する
’９４.１１……バス見学会、江戸東京博物館、清澄公園
’９４.１２……にほんごおしゃべりひろば　於世田谷ボランティアセンター（経堂）
’９５.０１……パンフレット印刷　3000部
’９５.０１……講演会　於三軒茶屋しゃれなーど　講師　下沢嶽

’９５.０４……会長　佐々木和子
’９５.０４……広報委員　吉川みのり
’９５.１０……世田谷小学校の木曜夜クラス閉鎖
’９５.１１……にほんごおしゃべりひろば　於世田谷ボランティアセンター（経堂）
’９６.０１～０２…日本語教え方講習会　於東京ガス世田谷支社、砧区民会館
講師（社）国際日本語普及協会　政田寛子
’９６.１０……世田谷区社会福祉協議会より活動に対し表彰される
’９６.１０……東京日本語ボランティアネットワーク脱退
’９６.１１……にほんごおしゃべりひろば　於世田谷ボランティアセンター（経堂）
’９７.０１～０２…日本語教え方講習会　於東京ガス世田谷支社、砧区民会館
講師（社）国際日本語普及協会　政田寛子
’９７.０４……副会長　坂本高子
’９７.０６……世田谷区国際交流課の依頼で、米国人のﾎｰﾑｽﾃｲを３会員が引き受ける
’９７.０９～１０…世田谷区職員ボランティア研修生５名受け入れ
’９７.１０……世田谷区けやきネットに登録
’９７.１０……バス見学会（東京都庁、ｻﾝﾄﾘｰ工場、江戸東京たてもの園）
’９７.１０……雑居まつりにＪＣＡ有志として出店
’９７.１１……にほんごおしゃべりひろば　於世田谷ボランティアセンター（経堂）
’９８.０１～０２…日本語教え方講習会　於東京ガス世田谷支社、砧区民会館
講師（社）国際日本語普及協会　政田寛子
’９８.０３……世田谷区国際交流課の依頼で、ドイツ人のﾎｰﾑｽﾃｲを５会員が引き受ける
’９８.０４……広報委員　山口三千也
’９８.０５～０７…世田谷ボランティア協会の依頼で、パキスタンの幼稚園児の送り迎えに
会員が付き添う
’９８.０６……世田谷区国際交流課の依頼で、米国人のﾎｰﾑｽﾃｲを２会員が引き受ける
’９８.０９～１０…世田谷区職員ボランティア研修生3名受け入れ
’９８.１０……雑居まつりにＪＣＡ有志として出店
’９８.１１……にほんごおしゃべりひろば　於世田谷ボランティアセンター（経堂）
’９９.０１～０２…日本語教え方講習会　講師　東京日本語研修所所長　高柳和子　於砧区民会館
’９９.０４……会長　成田皓子
’９９.０４……JCA会則一部変更
’９９.０９～１０…世田谷区職員ボランティア研修生受け入れ
’９９.１１……にほんごおしゃべりひろば　於世田谷ボランティアセンター（経堂）
’００.０１～０２…日本語教え方講習会　於砧区民会館　講師　王伸子
’００.０４……広報委員　松澤一平
’００.０４……世田谷ボランティアセンター経堂より下北沢に移転
’００.０４……火曜午前、水曜午前、木曜昼、金曜午前、夜の５教室が笹原小学校に移動
’００.０５……「らぷらす」に団体登録をする
’００.０７……世田谷ボランティアセンター（下北沢）金曜夜教室開始
’００.０９～１０…世田谷区職員ボランティア研修生3名受け入れ



JCAの歩み

’００.１０……笹原小学校の展覧会に会員の作品を出展
’００.１０……笹原小学校の音楽研究授業に韓国の学習者が参加
’００.１１……代田ボランティアビューロー月曜午前教室開始
’００.１１……代田ボランティアビューロー火曜夜教室開始
’００.１１……世田谷ボランティアセンター（下北沢）火曜、水曜午前教室開始
’００.１１……にほんごおしゃべりひろば　於砧区民会館
’００.１２……笹原小学校火曜日午前、水曜午前教室閉鎖
’０１.０１……ＦＭ世田谷のインタビューにトッテン知子出演
’０１.０１～０２…日本語教え方講習会　（社）国際日本語普及協会
講師　関口明子・鈴木雅子　於砧区民会館
’０１.０３.３１……代田ボランティアビューロー火曜夜教室閉鎖
’０１.０４…… 副会長　長野一美
’０１.０９～１０… 世田谷区職員ボランティア研修生７名受け入れ
’０１.１１…… にほんごおしゃべりひろば　於砧区民会館
’０１.１１…… 北沢小学校交換研究授業に韓国人教師の通訳として会員、学習者が参加
’０１.１２…… 講演会「ボランティアと奉仕」　講師　牟田悌三　於砧区民会館
’０２.０４…… 広報委員　泉　薫
’０２.０４…… 世田谷ボランティアセンター下北沢から三軒茶屋に移動
’０２.０４…… 世田谷ボランティアセンター（下北沢）の火曜午前教室が北沢小学校に移動
’０２.０４……　〃　水曜午前教室が世田谷ボランティアセンター（三軒茶屋）に移動
’０２.０４……　〃　金曜夜教室が代田ボランティアビューロー木曜夜に移動
’０２.０５……パンフレット印刷　2000部
’０２.０５～０６…日本語教え方講習会　講師　福田知行　藤平昌子　於砧区民会館
’０２.０４……ＦＭ世田谷［特派員報告」の取材を世田谷ボランティアセンター水曜教室で受ける
’０２.０６……笹原小学校の国際理解及び音楽の総合学習に韓国の学習者が参加
’０２.０６～０９…中町小学校の総合学習に会員と韓国の学習者が参加
’０２.０７……代田ボランティアビューロー夏ボラの小学生を月曜教室で受け入れる
’０２.０９～１１…世田谷区職員ボランティア研修生６名受け入れ
’０２.１１……にほんごおしゃべりひろば　於砧区民会館
’０２.１２……北沢小学校の火曜午前教室が世田谷ボランティアセンター（三軒茶屋）に移動
’０２.１２……笹原小学校木曜昼教室が代田ボランティアビューローに移動
’０３.０２……笹原小学校金曜午前教室が砧図書館に移動
’０３.０２……世田谷区文化・国際課職員、協力員研修受け入れ8名



JCAの歩み

’０３.０４……会長　長野一美

’０３.０４……笹原小学校金曜夜教室が船橋中学校に移動

’０３.０４……ＪＣＡ総会でJCA千歳船橋とJCA玉川に組織分割

’０３.０４……ＪＣＡ千歳船橋会則施行

’０３.０４……英字区報6月号の取材を水曜教室で受ける

’０３.０５～０６…日本語教え方講習会　講師　横浜国立大学講師グループ

’０３.０６……笹原小学校総合学習に韓国の学習者が参加

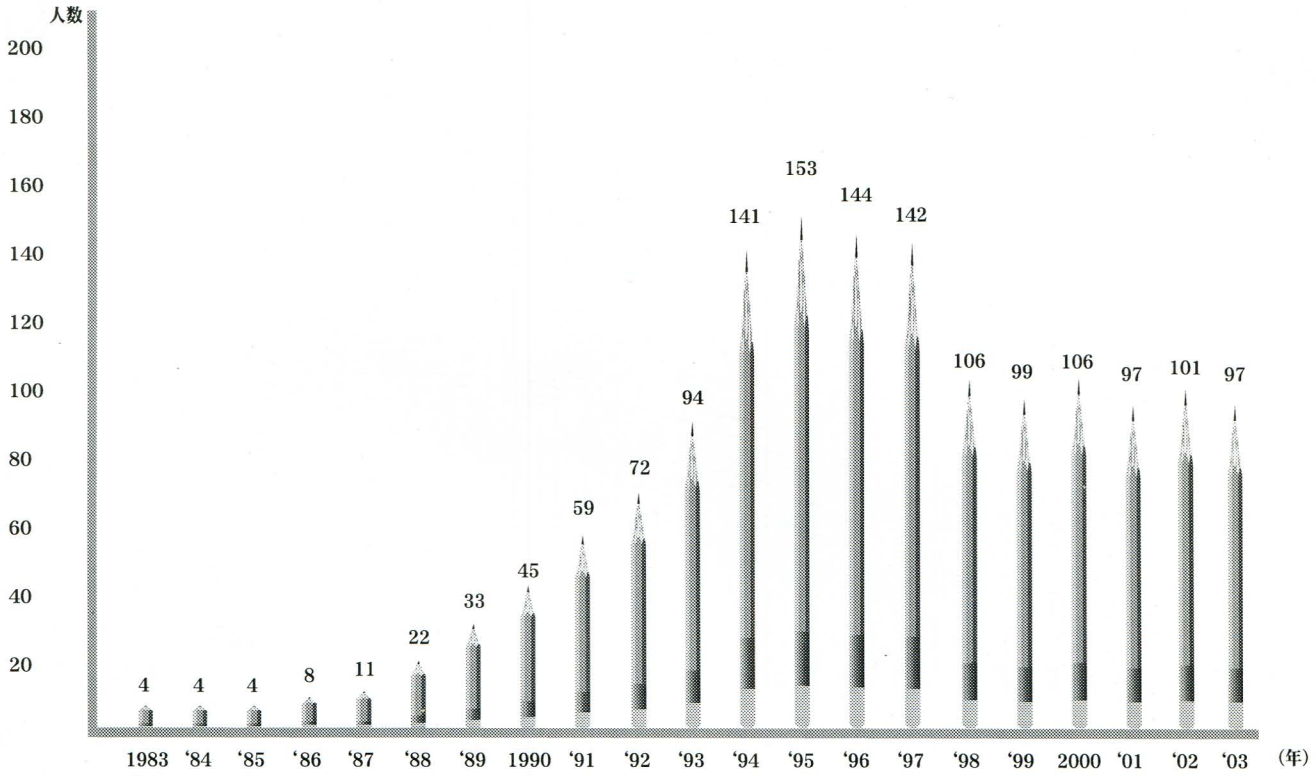
’０３.０７……代田ボランティアビューローで夏ボラの小学生を月曜・木曜教室で受入れる

’０３.０７……内閣府発行「ヤッテボラン」第6号の取材を火曜教室で受ける

’０３.０９～１０…世田谷区職員ボランティア研修生４名受け入れ

’０３.１１……にほんごおしゃべりひろば　於砧区民会館

会員数の推移（千歳船橋のみ）



あとがき

会員の方々のご協力を得て『風また風 創立２０周年 ＪＣＡ記念会報』を無事発行することができました。時間に追われながらの編集作業でしたので、行き届かない点も多々あろうかと思いますが、ご容赦の程お願い申しあげます。

お忙しい中、当初の予定を越える原稿が集まり、

さらに資料を寄せて頂いた皆様、ありがとうございました。

最後まで応援し協力してくれた私の家族に、ありがとう！

JCA千歳船橋　広報委員　泉　薫

風また風　創立２０周年　ＪＣＡ記念会報

敬称は省略させて頂きました。

発　行　日　　２００３年　　１２月　６日

発行責任者　　ＪＣＡ千歳船橋　　広報委員　　泉　　薫

印　　刷　　（有）清水印刷　　TEL　03-3306-5044